
八重洲さくら診療所

西宮寺欧海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八重洲さくら診療所

【Nコード】

N2213H

【作者名】

西宮寺欧海

【あらすじ】

不動産屋から破格の値段でテナントをかりた明は、東京の八重洲さくら通りに診療所を構える。だが、この物件には室町時代に死んだ17歳の女の幽霊が住み着いていたため、その後、二人の奇妙な共同生活が始まる。

ある開業医の物語

ここはとある不動産屋。

狭い部屋におかれた偉そうな焦げ茶色のソファーに二人の男が向かい合って座っている。

「この予算だと、この辺が限界ですねー。」

一人の男が赤いフレームのメガネを小さく上に持ち上げ、電卓を叩いている。

「うーん、それはちよつと……。」

「困りましたねー、うちも商売でね、これ以上はちよつとねー。」

「そこをなんとかできないですか？」

「このへんだと、相場がねー。」

だが、そのとき、男が大きく手を叩いた。

「そうだ、お客さん、いいのがありましたよ。」

メガネの奥で男の目が邪悪に輝く。

「え、ほんとですか？」

「ええ、ただね……。」

そこまでいうと、不動産屋の声が急に小さくなる。

「出るんですよ。」

「出る？ 何が？」

「ユーレイですよ、ユーレイが出るの。」

「ユーレイ？」

男は不動産屋の言った言葉を何度か頭の中で繰り返すと、思わず嘔き出してしまった。

「ハッハッハ、またまたー。子供じゃないんだから、その手は食いませんよ。」

だが、不動産屋はいたって真面目な顔で応える。

「いやいや、この辺では評判の物件でね。地元の人の間じゃ有名なんですよ。」

まあでもねー、これからお医者さんを始められるんじゃないやゲンが悪い
か。」

「いや、別にいいんですけどね、月いくら？」

「相場は30なんだけど、今回は特別に月5でいいよ。」

「5万っ？ ホントに5万？」

「そうなんですよ、もちろん風呂もトイレもついてるし、3LDKで5万なんてありえないんだけど、地元の人じゃ買い手がつかないんですよ。もちろん敷金礼金は頂きますがね。」

そのとき男の声が、狭い部屋に響き渡った。

「そこにします。」

この瞬間一人の開業医が誕生した。

明るい陽射しのもと、明は「八重洲さくら診療所」とかかれた看板を建物の外から

眺めていた。

こんなとき、自分の部屋に掲げた看板だけがなぜか輝かしくみえる。

「これでオレも一国一城の主だ。」

東京にある医大を卒業し、都内の病院で五年間、勤務医としてハードに仕事をこなして

きたが、なんとかここまで、たどり着くことができた。

勤務医時代の過去を振り返ると、幾度となくつらい思い出がよみがえってくるが

いまは将来への希望が明のすべてを包み込んでいた。

だが、ふと我に返る。

これからの課題がつぎつぎと頭に浮かんでくる。

まず看護婦を雇わなくてはならない。顧客の確保も必要だ。あとラ

イバルの偵察も。

立地条件は最高だから、恐らく敵はいないだろうけど。

勤務医時代には整っていた条件を、今度は自分で揃えなければならない。

やることは山積みだ。

明は大きくため息をつくとき、早速部屋に入り、荷物の整理を始めた。

「これが5万でありえないよなー。」

気づくと明は知らない間に独り言を喋っていた。

そのとき不意に、不動産屋の声が頭に浮かんでくる

「出るんですよ。」

「まさかねー。」

明が慌てて首を横に振る。

もうやめよう、つまらないことを考えるのは。

そのとき、玄関のほうからガチャンと音がした。

「誰だ？」

そういつて、明はドアをあけて玄関まで歩いていったがあたりに人の気配はない。

「なんだ、こどものいたずらか？」

すると、今度は、居間のほうから床をたたく音が聞こえてくる。

「どうなってるんだこの部屋は？」

明が再び、居間に戻ると、そこには白いブラウスを着た20歳ぐらいの女性が立っていた。

「うわっ。」

明は驚きのあまりその場でひっくり返りそうになった。

「こんにちわー。」

その女性は明るく笑いながら、小さく礼をした。

「こ、こんにちわ。」

「どうやら、私が誰だつて言いたい顔ね。」

明はコクリと首を縦に振る。

「実はあんまり大きな声じゃ言えないんだけどー。」

女の声が急に小さくなる。

「ここにだいぶ前から住んでる幽霊なの。」

「ふーん。」

だが、明は大して驚きもせず、幽霊の顔をまじまじと見つめている。

「あれっ、聞こえなかった？ 私、幽霊なのっ。」

「聞こえてるよ、幽玄の『幽』に靈魂の『霊』で『幽霊』だろ。」

「そうよ、そのなんとかの『幽』とレンコン？の『霊』で幽霊よ。

あれっ、おかしいなー。前にいた人は私を見て、すぐにシッポまいて逃げて

ったのになー。」

「だから、それは……。」

明が右手で髪をガサガサとかきむしる。

だが、相変わらず女は自分のペースでしゃべり続けている。

「あー、分かった。まだあなた、私が幽霊だって信じてないのね？
よーし、それじゃー。」

女は明を強引に玄関の扉の前まで連れて行くと、扉をあけて玄関の外からドア越しに

明に話しかけてきた。

「それじゃ、壁抜けいきまーす。ちゃんと見ててね。」

そういうと、女は宣言どおり、目の前のドアの真ん中からヌルツトあらわれた。

不動産屋から話には聞いていたが、明もさすがにこれには驚いた。

「おー、凄い。凄い。」

「凄いでしょー？」

得意満面の顔で女が微笑む。
が、しかし……。

「あれっ、おかしいなー。」

女は上半身と下半身のちょうど真ん中で、つつかえて出てこれなくなっていた。

「下半身がドアを通らないかも……。」

「おいおいっ。」

見るに見かねて、明が女の手をとり助けにかかる。

「大丈夫かよ。」

「大丈夫よ、ちょっと、腰のベルトが引つかかっただけだから……。」

額に汗して、必死にもがく幽霊。

だが、一向に抜けられそうな気配はない。

「ひよっとして、太ったんじゃないの？」

そういつて明は汗だくになりながら、必死で女の手を引っ張っていたが

次の瞬間、女は明の手を振り払い、真っ赤な顔でわめきちらした。

「よくもいったわね。覚えてなさい。あんたのこと呪い殺してやるから。」

「呪い殺してくれていいから、はやくそこから出てきてくれよ。」

明は両手で頭をかかえている。

「うるさいわね、もうほっとしてよ。」

「ほっとけるかよ、玄関のドアから、人間の下半身がぶら下がってる病院に

だれが治療にくるんだ？」

その瞬間、女の目にビククリマークが並んだ。

「あなたもしかして、医者なの？」

「そうだけど。」

明がちいさくうなずく。

「へーそうなんだ？」

「だったら何だよ？」

「お医者さんだったら、はやくこれをなんとかしてよ。」

「そんなもん、知るかーっ。」

そのころ、扉の外では、人々が鉄製のドアに突き刺さった人間に悲鳴をあげて

逃げ惑っていた。

『人生とは、裏切られた希望、挫折させられた目論見、それと気づいたときにはもう遅すぎる過ちの連続にほかならない。』ショウペンハウエルの言葉だ。

そして、明はいま眉間に手をあてながら、その言葉の意味を痛感していた。

頭痛の原因はもちろんこの女だ。

「ねえ、早く私の名前決めてよ。」

幽霊が診療用の机に寝そべりながら、明の機嫌を伺っている。

「うるさいなー、名前くらい自分で決めてくれよ。こっちは、こないだ自分が

起こした心霊現象のせいで、診療所の評判を落とされて、人生プランも

なにもかもめちゃくちゃにされてるんだぜ。」

明が机の上の書類を片付けながら邪魔臭そうに答える。

「そんなに怒らないでよ、私だって反省してるんだから。それにこの世にいる人に

名前をつけてもらわないと、私たち幽霊は、手足があってもこの世でご飯を食べたり、

アイスを食べたりできないのよ。あたしなんか、室町のころからずっとなにも食べて

ないんだから。」

「なんで、何百年もなにも食べてないやつが太るんだよ?」

その言葉に、幽霊はキツという目つきで応戦したが、自分の立場を理解したのか

手にしたコブシをグツとこらえる。

「それはあれよー、持病の肥満てやつよ。」

「持病の肥満ねー。」

明はもうちよつとましな嘘をつけとか思ったが、声には出さなかった。

「で、どんな名前がいいの?」

「そうねー。」

幽霊はキラキラとした目で、周囲を見渡した。

白塗りの壁にかけられたカレンダー、開け放たれた窓、ゆっくりと視線がさがり

吸入器、診療用のベッド ETC。そして、最後に目に入ったものがこの診療所のパンフレットだった。

幽霊はそれを手に取ると、明に見せた。

「これがいいなっ。」

「パンフレット?」

「違うわよ、なんでハーフみたいになってんのよ? ここ見て、ここ。」

そういつて、細い指で幽霊が指差したのは、八重洲さくら診療所の文字だった。

「うーんと、それじゃー八重子で。」

「ちよつとー、なにそれやめてよ。おばあさんみたいじゃない。」

幽霊は大きく首を横にふった。

「なんだよ、面倒臭ーな。つけて欲しい名前があるんなら最初からそう言えよ。」

「それじゃ、だめなのよ。もっと私をみて、私から連想する名前を

つけてもらわないと嫌なの。ほらこの病院にもついてるじゃない。可憐ではかない感じの名前が。」

「はかないやつが、500年も生きるかよ。」

どうやら、幽霊は「さくら」と名づけて欲しいらしい。

「ったく、仕方ないな。」

「うんうん。」

「それじゃー松子で。」

「えっ？」

幽霊の動きがとまる。

「松子っていったんだよ。」

「なんでよ？」

「オレ、その名前嫌いなんだよ。」

明は小さく咳払いをして続けた。

「それに桜は一つの季節が過ぎるとみんな忘れちゃうだろ。でも、人生で大事なことは

一枚の花びらとして一瞬に散ることじゃないんだ。自分自身が大きく太い幹となって、

多くの瞬間を生きることなんだ。」

その瞬間、窓の隙間からさわやかな風が二人の間を突き抜けた。

「なんか医者みたいなことをいうのね。」

「いや、一応、医者なんですけど……。」

幽霊は自分の顎に手を当てしばらく考え込んでいたが、ようやく重い口を開いた、

「まあいいわ。あなたが無い頭を一生懸命つかって考えてくれたみたいだし、

ありがたく頂戴するわ。」

「どういう意味だ？」

幽霊は指の先で鼻の頭をこすりながら、少し顔を赤らめて部屋をすり抜けていった。

「おい、ちゃんとドアを使えよ。まったく。どこまで行儀が悪いん

だ。」

だが、なんだかんだといいながらも、幽霊自身、松子という名前が気に入ったようだ。

ふときづくと、明は当初の問題をわすれ、松子が消えた夕陽に映えるオレンジ色の壁をながめていた。

その日の夜、明の食卓にはなぜか松子がいた。

「うーん、いい匂い。」

「ていうか、うちで食うのかよ。」

「そりやそうよ、まさか幽霊がデパートの試食に行くわけにはいかないでしょ?」

「いやまあ、そりやそうだけどさ……。」

「大丈夫よ、私そんなに食べるほうじゃないから。それじゃあ、ご飯入れるね。」

「お、おう……。」

数分後、食卓にはいくつかのおかずとともに、大きなドンブリにもられた白いご飯が並んでいた。

「茶碗でかくね?」

「なにいつてんのよ? いっぱい食べないと力出ないわよ。これからは診療所を訪れる

患者さんをはじめとして、私や看護婦さんまで支えていけないといけないんだから。」

「なんでさりげなくお前が入ってたんだよ?」

「私のいた室町時代はねー、それはもうひどいものだったわ。」

「人の話聞してる?」

「街は荒廃するわ、病気が蔓延するわでね。結局私はその病気で死んじゃったんだけどね。」

「病気で死んだんだ?」

明は湯呑みに入ったお茶を飲み干して、松子の話に聞き入った。

「ええ、労咳だね。17で死んだから、あつという間だったけどね。」

「労咳かー。」

「だけどね、町には頼りになるお医者さんがいて、毎日のように治療に来てくれたんだから。」

「でも、どうせその時代だと、『これは薬だ』とかいって、小麦粉の粉渡してたんだろ？」

明はしかめ面をしながら、右手の小指で耳あかをほじって結果を確認している。

「確かにくすりは効かなかったけど、そんなこと関係ないわ。気持ちの問題よー。」

なんかうれしいじゃない。自分と一緒に病氣と戦ってくれる人がいるなんて。

結果的に死んじやったけど、私は満足してるわ。」

「それなら、早く成仏してくれよ。」

「なんでそういうこと言うのよ。まだだめよ、恋さえしないで死んじやったんだから。」

それにそういうこと言いたいんじゃないの。あなたには立派なお医者さんになって欲しいのよ。」

なんて母親みたいな言い方をしながらも、松子は箸を握ると子供のような笑顔に戻った。

「おいしそー、それじゃー頂きマース。」

だが、わり箸で卵を口に運んだ瞬間、松子は激しく点滅を始めた。

「ちよ、ちよつと、なにコレ？」

松子は苦しさのあまり床に転げ落ち、体をくねらせている。

「おい、どうしたんだよ？」

慌てて、明が松子のそばにかけよる。

「卵に何入れたの？」

「別になんにもいれてねーよ、塩と胡椒だけだ。」

「塩ッ？ ちょっとやめてよ、私、成仏しちゃうじゃない。」

松子は怒りにまかせて飛び起きたが、やがてふらふらと倒れこむ。

「味がないと、卵が食べれないだろーが。」

明はいらいしながらも、抱きかかえた松子を一度床に置き、台所からグラスに水を

ついで松子の口に添えてやった。

ゴクンッ、ゴクンッ、ゴクンッ。

松子がグラスの水を飲み干した瞬間、ようやく体の点滅が止まった。

「はあーっ、死ぬかと思った。」

ほっそりとした手でのど元をおさえる松子。

「もう死んでるだろ？」

そっけない明の一言に、キッと松子が明をにらみつけた。

「あなたねー、これは人殺しよ？」

「だから、もうすでに一回死んでるだろ？」

「ちがうわ、医者のかせに幽霊の扱い方もわからないのかって聞いているのよ。」

「生きてる人間を扱うのがおれの仕事だ。」

だが、松子はすっかり部屋のすみでスネてしまっている。

「もう500年ぶりの食事だったのに。台無しだわ。アジシオくらい置いときなさいよ。」

明は小さく体育座りをする松子をみて、大きくため息をつくと優しく話しかけた。

「アジシオなら、大丈夫なのか？」

その言葉に、松子は顔をあげて瞳を輝かせる。

「あるのっ？」

「本当は嫌なんだけどな、アジシオ。」

そういつて、明は食器棚の下の棚から青いフタの小瓶をとりだした。
「卵でいいか？」

「……うんっ。」

松子は申し訳なさそうにちいさくうなずく。

「ちよっと待ってな。」

キッチンで卵を割る明に松子が近寄ってくる。

「ご飯冷えちゃうよ？」

「仕方ねーだろ。」

「ごめん。」

再びちいさくなる松子。

それをみて、明はちいさく笑うとフライパンにドロドロの卵をのせた。

「いいよ、卵は冷えたほうがうまいし。」

明の優しさに、連られて微笑む松子

「変な人っ。」

「ほっとけ。」

この日、いつもより遅い夕食にいつもより明るい灯がともった。

あの世からの落し物

科学が宇宙を目指してから、果たして何年の月日が流れてたのだろう。

今からほんの一万年前、人類の祖先は石で作った武器で、獲物を追いかけていた。

雷や日食を神の怒りだと信じ、雨を神の恵みだと信じて疑わなかった。

だが、今や人類は、恐竜たちやマンモスさえも成しえなかった地球という壁を

科学の力を使って越えることに成功した。

文化・歴史に違いはあれど、いま目の前にある現象を科学の力で説明できない

ことがどれだけ残されているだろうか？

だが、いま、まさにこの瞬間、宇宙を舞台にして、現代の科学では説明不可能な

事件が起ころうとしていた。

青白く光る不気味な一つの彗星が、地球に向かって飛んできていたのだ。

場所はかわって、ここは東京都にある八重洲さくら診療所。

明は今まさに至福のときを迎えていた。

「先生、診療所開院、おめでとunggございます。」

「ありがとう。」

明はあれから、松子が起こした幽霊騒動にもめげず、求人誌に募集をかけ、

優秀な看護師を雇い入れ、なんとか診療所開院にこぎつけたのだ。もちろん、看護師たちは、この診療所に幽霊が出るなど露にも知らない。

明は看護師たちと握手をかわすと、開院を祝いに来てくれた近所の人にも

挨拶をした。

「お、おめでとう、ございます。」

震えた声で挨拶をしてくれたのは、二つとなりのテナントでレストランを

営んでいる坂本さんだ。恰幅のいい体型はまさにシェフといったところだが、

顔が若干青白いのは、ドアから突き出た松子の下半身を一番に目撃したからだろう。

誰とも限らず、あんなもの見せられた日には、トラウマになるに決まっている。

今となつては、一番の理解者？といえるかもしれない。本人には迷惑な話だろうが。

「ありがとうございます。」

明は満面の笑みで、握手をかわす。少しでも不安に思われては終わりだ。

無神経と思われるも、こういう時に平常心で振るまえる人間が人生の勝者となるのだ。

だが、明の意思に反して、坂本さんは挨拶を済ませるとF1カーを彷彿とさせる

スピードでその場を立ち去っていった。

（坂本さあーん）

明の心の叫びが聞こえるようだった。

「先生、どうしたんですかね、あの人、急いで行っちゃいましたけど。」

そばにいた看護師が無邪気な笑顔で明に尋ねる。

「うん？ ああ、あのトイレじゃないかな。なんか三日前から漏れそうだ」

「って叫んでたから。」

不思議そうに首をかしげる看護師。そりゃそーだ。

そして、次に挨拶に来たのが、なぜかこの幽霊テナントの1階で花屋を

切り盛りしている60歳のミキさんだ。なぜかいつも本名は教えてくれない。

ミキが苗字だろうが名前だろうこっちはどっちでもいいのだが……。やたらとオカルト好きなのが困ったところだ。

「おめでとう。聞いたわよ、あんたのところまた出たらしいじゃない？」

「え、何がですか？」

ミキさんの話に心配そうに耳を傾ける看護師。

（おいっ、ババア。）

さっさと、この場から追い出したい気持ちをぐっところえて、気丈にふるまう明。

「ああ、うちの守り神でしょ？　すごいですね、あれが見えたんですか？」

なんか僕もよく知らないんですけど、噂じゃあれを見た人は金運がめちゃくちゃ

上がるらしいですよ。」

「あら、ホントー？　私はてつきり、ゆう……。」

「そうそう、たしかユウコっていう名の妖精でしたね。」

明の気迫におされたのか、ミキさんはそのまま黙り込んでしまった。

「あ……そう、それじゃー今日は、この辺で失礼するわね。」

そういつて、ミキさんはゆっくりと玄関を出ると階段を降りていった。

その様子をみて、大きくため息をつく明。

「なんか疲れましたね。」

「そうだな。」

看護師たちの『疲れた』とはレベルの違う疲労を抱え、明は今にも倒れそうだった。

だが、もう少しの辛抱だ。

明には一握りの希望があった。

いくら幽霊とはいえ、手足はあるわけだから、少しずつ看護師たちに彼女の存在を刷り込んでいつて、慣れたところで彼女の正体が幽霊だと

カミングアウト出来れば、すべて丸く収まるのではないかと……。

だが、数分後、それがいかに甘い考えであるかを、明は思い知らされることになる。

ズドンツツ。

突然、大きな音がしたかと思うと、天井から大きな物体が落ちてきたのだ。

それは、よく見るとダルマのように大きく肥えた丸刈りの男性だった。

きゃああああ。

三人の看護師のうち、二人は気絶し、一人は大きく目を開き口を両手で押さえている。

「先生、こ、これはいったいなんですか？」

両手で頭をかきむしる明。

「えーっと、これはー。」

「これは？」

「まあ、なんというかー。」

明の説明にごくんと唾を飲み込む看護師。

「守り神のユウコだよ。」

この瞬間、明は診療所の破滅を確信した。

コンコンコン……。

左手でおでこにサンバイザーを作りながら、明は机とボールペンで

湧き上がる怒りをリズムに変えていた。

「えっとー、なにかこの診療所に不満でもおありですか？」

明の向かいには先ほど、天井から落ちてきた男性がしょんぼりと座っている。

「ちよつとー、そんな聞き方じゃ、患者さんが答えづらいでしょ？」
就労不可能となった三人の看護師にかわって、明の隣には松子がい
た。

「いえ、いいんです。私が悪いんで。」

明の眉間に大きなしわが寄る。

「いや、別に私は怒ってるわけじゃないですよ。ただうちの診療
所に改善できる

点があるならね、すぐにでも改善したいと。なぜこの診療所はこん
なにも災難を

引き込んでしまうのか、その理由が知りたいわけです。」

「立派に怒ってるじゃない？」

松子がボルテージの高い明をたしなめた。

「実はね、私、幽霊なんですよ。」

その答えに、明は大きくため息をついた。

だが、悲しいことにもはや驚く気力さえ起きない。

これが人間の免疫というやつだろう。

「ほう、その幽霊さんがどうしてこちらへ？」

「実はあの世に登っていく時に、体重制限に引っかかってしまいま
して……。」

紐が途中で切れてしまったんですよ。そしたらここにズドンですよ。
落ちるのは

どこでも良かったんですけどね。なんか笑っちゃうでしょ。ハハハ

ハ……。」

バンッ。

その瞬間、明が大きな音を立てて机を叩いた。

「笑い事じゃねーよ。こっちは今日、開院なんだぞ。なんで二つと

なりの

趣味の悪いレストランに落ちなかったんだ？」

「ひいつ、すいません。」

幽霊は両手を前に合わせて、深く頭を下げている。

「ちよつとやめなさいよ、患者さん怯えちゃってるじゃない。」

再び松子が止めに入る。

その様子を伺いながら、男は恐る恐る会話を続けた。

「それでですねー。」

「なんででしょうか？」

血走った目で、男を凝視する明。

「ここに落ちたのも何かの縁ということで、一つ先生にお願いしたいことがあります。」

「まあ私もプロですからね、医学に関することならなんなりと仰ってください。」

といいつつも、明はすでに机の上の片づけを始めていた。

「わ、私はあの世に行くためにやせたいと思うのです。」

すると、机の整理をしていた明の手がぴたりと止まった。

さつきまで怒り心頭だった明だったが、男のこの奇妙な発言によっていつのまにか

興味が怒りを飲み込んでしまったようだ。

「えっ、あの世に行くためにやせるのですか？」

男はその場でちいさくうなずいた。

明と松子は思わず顔を見合わせる。

「なんか私どもには話がよくわからないんですが、それならこのままやせないで

この世にいればいいんじゃないですか？」

明のとなりで小刻みにうなずく松子。

だが、男の顔は真剣そのものだ。

「いやなんです。このまま何もしないで、あの世に行くのが。」

気づくと明は松子が用意したお茶をズズズと飲みながら、男の話を

聞いていた。

「私はいままで平平凡凡に人生を過ごしてきました。私自身、それが普通なのだと、

それが幸せなのだと思っていました。ひょっとしたら私は人より器用だったのかも

しれません。」

再び、明と松子が顔を見合わせる。

「ですが、あの世に登っていく時に、私は気づいてしまったのです。この世がどれだけ美しいのか、そしていかに自分の人生がからっぽだったかを。」

パンツ。

今度は男が大きな音を立てて机をたたいた。

その場で飛び上がる二人。

「だから、私は決めたんです。この世でダイエットをして、自力であの世へ

行つてやろうと、体重制限なんかで、私をあの世から追い返したやつらを

この手で見返してやろうと思っています。だから、先生、お願いです。

ぜひこちらで私のダイエットのメニューを組んでいただけないでしょうか？」

奇妙な話の展開に戸惑いながらも、男の熱い話にうなずく明。

「うーん……いや、実に素晴らしい考えをお持ちだと思います。た

いした理由もなくこの世で自縛霊が続いているやつに今の話を聞かせてやりたいくらいで。」

そういつて、明はちらりと松子の方をむくと、松子はプイっと横を向いた。

「ですが、私は腐っても医者なんです。カタチはどうあれ、あなたが死ぬための

お手伝いはできないし、するつもりもありません。」

だが、その瞬間、あわてて松子が明の耳を引っ張った。

「いででででっ、おいっ、なにすんだよ？」

明が必死で松子の手を振り払う。

「それはこっちのセリフよ。アンタ一体、何考えてんの？ 意地張
つてる場合じゃない

でしょ？ 開院したのにまだお客さんが一人も入ってないのよ。」

「これが客かつ？」

「どうみてもお客さんじゃない。」

「普通の客はドアから入ってくるもんだろ？」

「アンタは細かいことにこだわってるから患者さんがつかないのよ。」

「お前が幽霊騒ぎ起こさなきゃ、もつと順調だったよ。」

だが、次の瞬間、松子の顔がぎゅーっと明の顔に近づいてきた。

「いい？ この世もあの世もお金がないと何にもできないの。ましてあなたはここの

院長でしょ、ちゃんと切り盛りして、みんなの食い扶持を稼がない
といけないんだから

しつかりしてよ。」

耳元で説教をする松子につられて、明の声も小声になる。

「でも、相手は幽霊だぜ？ 金なんか持ってるのか？」

「わかんないけど、少しはあるでしょ。」

するとそのとき、二人の顔の10センチ手前に男の顔が急に現れた。

「大丈夫、ちゃんと、お礼はさせていただきますよ。」

「わあっ。」

声を揃えて驚く二人。

「いきなり現れないでよ、」

少し涙目になっている松子。

「すいません。」

松子に怒られると、男は再び低姿勢にもどった。

「とにかく、これで交渉成立よね？」

「まあ、そうかな。」

幽霊に自分の作った病院を仕切られるのは変な感じだが、理屈はどうあれ

明は松子が持つ芯の強さに頼もしさを感じずにはいらなかった。ただひとつの欠点をのぞいては……。

「それじゃー、まず町内をランニングしましょう。私についてきて

」

「今からかよ。」

「あたりまえよ、善は急げでしょ？」

「まあそりゃそうだけど……。」

「大丈夫よ、あなたに迷惑はかけないから、それじゃ行くわよ。」

「はいっ。」

「それじゃー院長、あとはよろしく。」

そういつて松子が病院の壁をスルスルつと抜けていくと、あとに続いた男は

張り替えたばかりの壁をバリバリ突き破りながら、表へと飛び出していった。

「おいっ、人の診療所を壊すなーっ。ドアを使えーっ。」

「あっ、ごめんなさい、患者さん、壁抜け無理だったみたいね。院長ー、壁直しとして。」

そういつて二人が街へ飛び出したあと、病院の中には、大きく開いた二つの穴から

さわやかな春の風が突き抜けていた。

「だから、幽霊って嫌なんだ。」

第三話につづく

江戸の凄腕料理人

「それじゃあ、そのリストにしたがって食事続けてください。ただし、一日30分のウォーキングは必ず続けること。」

「はいっ。」

「それじゃー、がんばって下さいね。」

明は回転椅子で向きをくるりとかえると、男は申し訳なさそうに「ありがとうございます。」

と深くお辞儀をして、部屋を出て行った。

明は男の後姿を見送ると、深くため息をついて、近くにいた松子に話しかけた。

「あのーなんだ、あの世から落ちてきたと聞いたから、いったいどんなやつかと」

思ったが、実際に喋ってみると、割といいやつみたいだな。」

松子は小さくうなずくと、幽霊の気持ちを代弁するかのように胸を張って答える。

「そうよ。みんな、見た目や常識で判断するから、本当にいい人と悪い人の区別が出来なくなるんだわ。」

明も松子につられて小さくうなずく。

「そうだな……。オレも気をつけないといけないな。まあ、おかげで雇った看護婦は」

みんな辞めちゃったけどな。おまけに天井も壁も穴だらけだし。」

明はそういつて苦笑いを浮かべながらも、ボロボロになった病室を優しい眼差しで眺めた。

「はいはい、文句ばっかし言わないの。今日はすごい人が来てるんだから。」

「すごい人？ 誰だよ？」

「あなたでも知ってる有名なよ。」

「おお、そんなにすごい人か？ それはチャンスだな。」

明は松子の言葉に元氣を取り戻した。

「そうよ、せつかくのチャンスなんだからちゃんと診察してよね。この病院の命運もかかってるわけだし。準備はいい？」

明がコクリとうなずく。

「それじゃあ呼ぶわね？ ミッチーさん、どうぞ。」

「ミッチー？」

そういつて松子に促されると、待合室から照れくさそうに一人の男が現れた。

「こんにち……わ。」

明はそこまで言ったところで言葉を失った。

赤い鎧武者が切り落とされた自分の首を左手に抱え、そこに立っていたのだ。

「こんにちわ、石田三成です。なんか戦争してたら首がはずれちゃって……。」

「すいませんが、帰ってもらえませんか？」

明は目頭をおさえながら即答した。

だが、その明を必死で松子が説得する。

「あら、診療拒否？ あなたも偉くなつたものねー。」

「お前こそ何様だよ？ しかもあんなモンどうやって治せつていうんだ？」

そこですかさず、三成が二人の会話に口をはさむ。

「大丈夫ですよ。骨と血管と神経をつないでくれればそれでいいんです。」

「病人は黙ってろ。」

そういつて明に一喝されると、三成は急にしょんぼりしてしまった。「ちよつとー、いまの一言、酷くない？ 彼はこうみえても急患なのよ。」

「四百年さまよってて、どこが急患だよ？ 立派に生き延びてんじやねーか。」

「よく考えて。四百年間、いろんな病院に受け入れを拒否され続けてきたのよ。」

可愛そうだと思わないの？」

「可愛そうだと思うよ。その病院が。」

そのとき、再び、三成が会話に加わってきた。

「やつぱりここでも治療は無理ですかねー？」

明は深くため息をつくとき、重い口を開いた。

「見てもらったら分かると思うんですが、うちはあくまで診療所なのでね、

あまり大きな手術はできないんですよ。」

「そうなんですか。」

そういうと、三成は肩を落としてうなだれてしまった。

それを見ていた松子が明に食い下がる。

「ねえ、可愛そうじゃない？　なんとかしてあげましようよ。」

「なんとかかっていつてもない。ここにはたいした設備もないしな。」

「うーん……。」

だが、一人で悩む松子の目に、黄色い容器に入ったボンドが飛び込んできた。

「そうよ、これよ。」

松子はそれをつかんで、天高く掲げた。

「いや、それはないだろう。」

思わず首をひねる明。

三成も明のそばですっかり青ざめている。

「大丈夫よ、失敗は成功のもとなんだから。」

「いまの言葉を聞いて、誰が安心できるんだ？」

しかし、五分後、松子の計画は実行に移された。

「はい、じゃあ歩いてみて。」

松子がそういつて、手をパチンとたたくと鎧武者はガシャリガシャ

りと

音を立てて歩き始めた。

「おお、案外いけるモンですね。」

「でしょ？ 人体っていうのは結構器用にできてるもんなのよ。」

そのそばで、明はいささかご機嫌ななめだ。

「医学へのぼうとくだ。」

「なにいつてんのよ。医学のために人がいるんじゃないわ。人のために医学があるのよ。」

「まー、それはそうだけど……。」

松子は明を上手になだめると、三成に話しかけた。

「気分はどう？ 三成さん。」

「はい、最高です。」

三成は松子の荒療治にもかかわらず、笑顔を取り戻していた。

「よかったー。とにかくこれで一件落着ね。」

「ちよつと表を走ってきてもいいですか？」

「いいわよ、日常生活がちゃんと送れなきゃ意味がないもんね。」

そこまで、いったところで明が慌てて止めに入る。

「それはちよつと……。」

「なに？ 私の治療になにか不満でもあるわけ？」

その場で睨み合う松子と明。

「そうじゃないけど、病院のまわりを鎧武者が走り回るのはちよつと。」

「そうかなー。乱髪形兜二枚胴具足だから、結構オシャレでいいと思うけどな。」

「鎧の種類じゃねーよ。鎧をきて街を歩くなってるってんの。」

「あーそついうこと？ でも、残念ながら、もう外に行っちゃったみたいよ。」

「えっ。」

松子の言うとおり、明が気づいたときには、すでに三成は外へ繰り

出していた。

そして、二人のそばには、先ほどの三成の首が床の上でゆらゆらと揺れている。

「おいーっ、あいつ自分の首置いて行きやがった。どこまで鈍いんだよ。」

そのとき、三成の首が明に話しかけた。

「ちよつと陰口はやめてもらえませんか？ 僕、傷つきやすいんで。」

「

「今の状態は傷ついているとは言わないんですか？」

そのとき、窓の外で、住民の声が聞こえた。

「きゃー、鎧武者よ。首の無い鎧武者が走っているわ。」

明は思わず頭を抱えた。

「悪夢だ。」

明の横で松子がポツリとつぶやく。

「でもよかったわ。三成さんが元気になって。」

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

三成が生首のまま、頭をペコリと下げる。

「いや、三成さん、あなた騙されてるからね？ 何も解決してないからね？」

「これでいいのよ、患者の心をケアするのも医者の仕事なんだから。」

「

松子はいつも自信満々に答える。その理由はさだかではないが。

「とにかくだ。その首をどこか別の場所に移してくれ。次の患者に見られたら

また悪い評判がたつ。」

「はいはい。」

松子はその首を、診察室に置いてある空っぱの花びんの上に乗せて、次の患者を呼んだ。

「次の方どうぞー。」

「ちよつと人の話聞いているー？ 目立たない場所に置けっっていつて

んの。」

「大丈夫よ、花びんの上に置いてあつたら、生首だつて花だつて思つちゃうんだから。」

「思つかーっ。」

だが、明の思惑とは裏腹に、松子は勝手に次の患者の応対に回つた。「どーすんだよ、おいっ。」

両手で頭を抱える明。

だが、松子はいたつていつも通りだ。

「あー、ノブリンじゃない？」

カーテン越しに松子の大きな声があがる。

「お久しぶりです。幽霊さん。」

診察室では明の頭にハテナが飛び交っていた。

「のぶりん？ おい、ひよつとして織田信長とかいうんじゃないだろうな？」

「違うわ、一般の方よ。でもとっても有名な方。」

明はほつと胸をなでおろした。

「有名ななんてそんなやめてください。」

「ま、いいからいいから。」

幽霊がさつとカーテンを横に引く。

「それじゃー、こちらにどうぞ。」

「こんにちは。始めまして、江戸時代に料理研究家をしていました、信子といます。」

そういつて、現れたのは上半身と下半身がバラバラになったエプロン姿の女性だった。

「信子さんはね、江戸時代では有名なカリスマ主婦として、女性たちから尊敬されていたのよ。」

そうやって堂々と信子を紹介する松子を、明は手招きのジェスチャーで呼び寄せる。

「松子君、ちよつと。」

「もう、なによ?」

松子の顔が明のそばまでくると、容赦なく明のデコピンが松子の額に命中した。

パチンツ。

「いったーい。」

思わずその場でうずくまる松子。

そして次の瞬間、両目に涙をためて、松子は明をキッとにらみつけた。

「痛いわねー、何すんのよ?」

「あれのどこが一般人だ?」

「江戸時代に主婦やってたんだから一般人じゃないつ。」

「幽霊やつてる時点で一般人じゃねえよ。しかもなんで胴体と下半身が真つ二つになつてんだよ。」

そこまでいうと、松子は急に青ざめてしまった。

「えっ? あなた医者のかせにあの有名なタマネギ事件を知らないの?」

「何だよ? タマネギ事件で。」

「うつそー、信じらんない。本当に知らないんだ?」

そばでムツとする明を尻目に、松子は淡々と説明を続けた。

「タマネギ事件というのはね、天才料理人の信子さんが家でタマネギを切っていた時に

手が滑って、間違つて下半身を切り落としてしまった有名な事件よ。」

「どんな包丁? しかも医学と関係なくね?」

そのとき、信子の上半身があわてて二人の会話に加わってきた。

「ちがいますよ、皆さん誤解してます。そのとき私が切つたのは人参なんです。」

「いや、どっちでもいいよね?」

「とにかくですね。私は早くこの体を元通りして、そのとき完成し

なかった料理を

仕上げてしまいたいんです。」

「そんなこといわれてもねー、第一、何を作ってたんですか？」

明が腕組みをしながら尋ねると、信子はうつむきながら小さな声で答える。

「クレープです。」

「人参いらないよね？　なんで人参切ったの？　絶対無駄死にだよね？」

「ほつといてください。イチゴが足りなかったんです。」

そのとき、そーっと、机の上のボードに松子の手が伸びてきた。

その手をがっしりと明の手がつかむ。

「おいっ、まさか。また同じ悲劇を繰り返す気じゃないだろうな？」

「えへへ、バレた？」

気まずそうに頭をかく松子。

「なんですか？　悲劇って。」

そのとき、不思議そうに二人の会話を聞いていた信子の目に、花びんの上に乗っていた

生首が飛び込んできた。

「あ、あれ……、ま、まさか……、きゃああああ、人間の生首！」

「

両手で慌てて目を覆う信子。

「信子さん、鏡で今の自分の姿を見ましょう。状況的に引き分けですよ。」

だが、すっかり信子はおびえてしまっている。

明は深くため息をつくとき、松子に指示を出した。

「仕方ないな、松子、とりあえずその首を便所にでも流してきてくれ。」

「えっ？」

花びんの上で驚く三成。

「当たり前だろ。ほかの患者さんが迷惑してるんだから。それが嫌

なら、早く自分の体で

とりにきなさい。」

「いやそれはそうなんですけど……。いま体の方が埼玉の方を走ってまして、戻ってくるまであと何日かかるか。」

「なるほどねー、それは仕方ないなー。おい、松子、確か近くにボーリング場があった

だろう。それをそこに寄付してきてくれ。」

「分かりました。五分以内に戻れるように努力するんでどうかそれだけはご勘弁を。」

三成はあわてて信子から見えない位置に移動した。

「さて、信子さん……。」

そういつて信子の方をちらりと見ると、明は苦笑いをしながら答えた。

「見ての通り、うちはなんの施設もないオンボロの診療所です。それにそれだけ

じゃなく、手術をするには僕自身の腕が足りないところもある。だから、いまの時点で

あなたの体をもとに戻すことはできません。」

その言葉に信子がうつむきながら小さくうなずく。

「ただし、あなたの夢を叶えることはできる。」

その瞬間、信子が顔を上げる。

「ここであなたが思う料理を僕たちにつくってくれませんか？」

「えっ？」

「どうせ、ここはまともな人の来ない診療所です。だから、僕はもう腹を決めました。

今日はもうここを休診にするので、あなたがこの世で遣り残したすべての料理を

僕たちに作って欲しいのです。ただし、料理にはアジシオを使ってもらいます。」

明の言葉に信子の目が急に輝いた

「いいんですか？ 本当にそんなことをしてもらって。」

「ええ、患者の希望に答えるのが私たち医者勤めですから。料理に必要なものはこちらで揃えるので。どうでしょうか？ やってもらえませんか？」

「ぜひやらせてください。」

信子は感激してそういうのが精一杯だった。

「というわけで、三成君も食っていくだろ？ 体ももうすぐ戻ってくることだし。」

明がそういうと、ベッドの陰に隠れていた三成の首は、やがてひょこひょこと現れ、

申し訳なさそうに明の前で小さくおじぎした。

「それじゃあ、松子、表のドアに休診の看板をつけてきてくれ。」

「オッケー。」

松子は急いで玄関までいくと、ぐうぐう鳴るおなかを押さえながら、ドアをロックして、

「休診」の看板を吊り下げた。

一方、明は信子を台所に案内した。

白い冷蔵庫をガチャリとあけると、中にオレンジの灯りがともる。

「調理に必要な食材はだいたいここに揃っていると思いますが、なにか足りないものがあれば言ってください。」

「うわーっ、いっぺん触ってみたかったのよね。冷たい。」

子供にもどったようにはしゃぐ信子。

次に、明はキッチンの下の戸棚を開けた。

「それから、包丁はこちらに入っています。奥から野菜用、肉用と順番に並んでいるので。」

「わかりました。」

信子は台所の配置を一通り頭にいれると、座布団を四枚ほど乗つけた回転椅子の上で、

うでまくりをして、早速、料理開始のベルをならした。

「それじゃあ始めましょうか？」

いつもは静かな台所から、タンタンタンというリズムを刻むまな板。グツグツと音を立てる鍋。上半身とは関係なくタップを踏む信子の下半身。それから楽しそうに料理を手伝う四人の声がいっしょになって響いてくる。それはまるで信子を指揮者として、台所がひとつのオーケストラを形成しているようだった。

一時間後、素敵な香りを漂わせながら、小さな食卓にはキレイな皿に盛られた

たくさんの花が咲いていた。

「それじゃあ、みなさん召し上がってください。」

そういつて、信子はエプロンはずすと四人とおなじ食卓に着いた。

「いただきます。」

四人は手を合わせておじぎをすると、目の前にならんだ豪勢な昼食に舌鼓を打った。

「おいしいね、コレ。」

「おい、一人で何個食べてんだよ？ それ、オレのぶんだぞ。」

「はいはい、ほかに色々あるんだから。」

つかみ合いになる明と松子をなだめながらも、信子は満面の笑顔をとりもどすと

楽しくゆったりと流れる会話の中で、いつしか食卓から姿を消していった。

「ありがとう。」という言葉を残して。

一方、診療所の外では、休診の看板がかかったドアの前で、持病の「痔」の治療に来た

坂本さんがただ一人もがいていた。

第四話につづく、

次号は7月1日を予定しています。もしよかったらご覧ください。

困った時はお互い様です。

ミンミンミンミンミー

せみの鳴き声をBGMにして、アスファルトから跳ね返る地熱が目に見える景色を歪めていく。

そしてここに、タキシードをびっちり着込んだ一人の男が。ふらふらと背中を丸めながらやってきた。

ぼやけた景色の先に見えるのは、「八重洲さくら診療所」と書かれた看板だ。

一方、診療所では、玄関先で松子がほうきとちりとりを持って鼻歌を歌いながら、淡々と掃除をこなしていた。

「お掃除、お掃除、楽しいな。」

「あー、すいません。」

「あー、お客さん？ ちょっと待ってくださいね。」

松子がそういつて、ちりとりとほうきをその場に置こうとすると男はニヤリと笑ってちいさく首を横に振る。

「いえ、いいんです。客じゃないんで……。」

そして、次の瞬間、男はギラリと鋭く光る白い歯をみせると、一気に松子に襲い掛かってきた。

「お前の血をよこせーっ。」

「きゃーっ。」

一瞬にして壁際に追い詰められる松子。覚悟を決めたように両目を閉じる。

だが、しばらくしても何も起きない。

松子は恐る恐る目をあけると、男は壁にもたれかかってぐったりとしていた。

「大丈夫ですか？」

先ほど襲われたこともわすれ、松子は男にゆっくりと駆け寄る。

「どこか悪いんですか？」

だが、松子の質問に答える様子もなく、男は小さな声でブツブツとつぶやくだけだ。

松子は途方にくれると、やがて何かを決断したように一気に近づいて、男の声に耳を傾けた。

「よ、よう……」

ひどく震える手を握りしめながら、天使のように微笑む松子。

「よう……、なんですか？」

男は目を細めながら、青白い顔に薄笑いを浮かべ松子に謝った。

「妖怪だったんだな？ アンタ。すまないことをした……」

。

松子は男の言葉に満面の笑みを浮かべると、数秒後、そばにあった緑のデッキブラシが

男の頭に命中した。

カコンッ。

「目が覚めましたか？」

数秒後、男は診療所のベッドにいた。

「すいません、うちの若い者が失礼をしてしまったようです。」

明が深々と頭をさげる。

「どっちが失礼よ、17のレディーを捕まえて妖怪だなんて。」

松子は器具をタオルで拭きながら、プイと横を向いている。

だが、今度は逆に男が二人に頭を下げた。

「すいません、どうしても生きた人間の血が必要だったものですか
ら。」

「おたくは？」

「えー、私、^{はろ}阪野といまして、隣町で吸血鬼をしています。」

「阪野さん、吸血鬼を職業みたいに言わないでもらえますか？」

明はポリポリと頭をかきながら話を続けた。

「で今日はどうしてこちらへ？」

「いや、女房が実によく出来た人間で、いつも血を分けてもらっていたんですが、

この度、妊娠しちゃいましてー」

明の目が大きく縦に開く。

「おおつ、いいことじゃないですか？ 新しい命が生まれるんだから、素晴らしいこと

だと思えますけど……。」

明はカルテを挟んだバインダーの上で、ボールペンを太鼓のようにパンパンと鳴らしている。

「いや、じつはそれがそうでもないんですよ。」

そういうと、男はゆっくりと唾を飲み込んだ。

「妻が妊娠を理由に血を分けてくれなくなっただんです。胎児に影響が出るからと。」

しかも、話はそれで終わらないんです。子供の教育に影響が出るから出産後も

血を吸うなとまで言うんです。」

そのとき、二人の会話に松子に加わってきた。

「だったら、トマトジュース飲んだらいいじゃない？」

その瞬間、阪野の顔色がガラリと変わる。

「あなたがた人間はどこまでわかってないんだ？ 私は血が飲みたいんじゃないんだ。」

血を飲まないと死んでしまうんだよ。よってたかってトマトジュースを出しやがって。」

明はちいさくうなずきながら、話を元に戻した。」

「なるほど。それで私に何をしろと？」

男は明の言葉にようやく落ち着きをとりもどすと、大きくため息を吐いて続けた。

「血を分けてほしいんです。一生困らない位の。」

「血を？」

明はもたれかかった椅子から慌てて飛び起きた。

「冗談じゃない。どこにそんな血があるっていうんだ？」

「おねがいしますよ、先生なら色んな患者からいっぱい血を集めて来れるじゃないですか？」

渋い顔をする明。

「しかしねー、残念ながら、私のところに来る患者はみんなあの世のモノばかりでね、

生き血を吸うのはちょっと無理があるんじゃないですか？」

男は、少しの間考え込んでいたが、やがてなにかを思いついたように話し始めた。

「わかりました、それなら、先生の血を吸わせてください。」

「オレの血？」

「ええ、どんなむさいオッサンの血でも美味しそうに吸うので。どんなに体臭が臭くて

副作用で頭がハゲたとしても構わないので、先生の血を僕に吸わせてください。」

「おいっ松子、十字架持つて来い。」

この瞬間、明は男をなぐった松子の気持ちが悪くわかった。

「じよ、冗談ですよ、先生。冗談に決まってるじゃないですか？」あわてて、男は明のアクションを止めた。

明はいつものように大きいため息をつく、ゆっくりと話し始めた。「まっ、どちらにせよ、こんな小さな診療所にそんなにたくさんの血が集まるはずがないので

今回はあきらめてもらえませんか。」

「そうですか。」

男は大きく肩を落とすと、明にいわれたようにゆっくりと診療所を出て行くとした。

だがそのとき、松子が大きな声をあげた。

「待って、阪野さん。」

「えっ？」

その場で立ち止まる男。

「大丈夫よ。私にまかせてちょうだい。」

「またお前かよ。」

そういうと明は、いつものように松子のそばで大きな音をたてて頭をかきむしっていた。

「いやー、坂本さん。わざわざお呼び立てしてもうしわけございません。」

「いえ、いいですよ。それより本当なんですか？ 毎日タダで血液検査してくれってるっていうのは？」

明は多少うつむき加減に返事をする。

「ええ、本当ですよ。じつは新しい検査キットが手に入りましてね。実験台といっってはなんなんですけど」

ちよつとお手伝いしていただきたいと思ひまして。」

「あーそうなんですか、いいですよ。私に手伝えることがあるなら私も体のことが心配なんです。」

明は心の中で坂本さんに手を合わせて深く懺悔した。

「それじゃー、明日もまたこの時間にきてくださいね。」

「えっ、明日もなんですか？ 今日、結構抜いたように思ったんですけど……。」

冷や汗が明のこめかみを流星のようにすばやく落ちていく。

「ええ、そうなんですよ。今回のキットはひと月の経過を追うものなので。」

「ひと月？ そりゃまた大変だなー。」

坂本さんが大きく目をあける。

そしてその横ではカーテンをへだてて、阪野が坂本の血を一気に飲み干していた。

「それじゃーまた来ます。」

坂本は周囲をキョロキョロ見回しながら、ゆっくりと診療所を出て

行った。

どうやら、まだ松子の与えた恐怖が身に染み付いているようだ。

坂本が帰ると、阪野も帰り支度をはじめた

「それじゃー、また来ます。」

「いいよ、一週間ごとに家に送るから。」

「本当ですか？ 助かります。あの人の血メチャクチャまずいんですけど、ないよりマシですもんね。」

「ああ、あの人はいつも自分の作ったまずいパスタを試食してるかな。うまいわけがないだろう。」

明はふたたび坂本さんにふかく懺悔した。

「それじゃー、ありがとうございました。」

そういうと、阪野は階段をおり、街の中へうつすらと消えていった。それを見て、松子がやわらかな笑顔を浮かべる。

「いいことしたあとは気持ちいいね？」

人をだまして「いいこと」というこの女の神経が、明にはいまだに信じられない。

だから、幽霊は恐ろしいのかもしれない。

「とにかく、一件落着かー。」

明は大きなため息をつく、その場で天井を見上げた。

だが一カ月後、明のもとには大きく肥えた一人の男があらわれた。

「あの一、すいません。もらった血を毎日飲んでたらメタボになっちゃいました。」

「もう、知らんわ。」

明と松子はその場で大きくひっくり返った。

第四話 完

次回は7月10日を予定しております。
よかったですらまたみにきてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2213h/>

八重洲さくら診療所

2010年10月10日14時40分発行